「今夜、佳美がレズの世界に誘うからな。母親として深雪はその誘いをしっかりと受け止めるんだぜ」
ベッドの上で、四つん這いのままで後ろから貫かれている深雪は耳を疑った。総一が信じられないことを言い放ったのだ。
「佳美とそんなことできるはずがないじゃないの。血をわけた親子なのよ」
ずんと総一の男根が深く突き刺さってくる。
「佳美は承諾したぜ。母娘がレズの関係を結ぶことをさ。」
「･･･いやよ、絶対にいや」
四つん這いで首を何度も左右に振る。
「命令に従えないというんだな」
「佳美とだなんて･･･そんなことできないわ」
「それじゃあ、この関係ももうおしまいだな」
総一はあっさりとペニスを抜いた。四つん這いの深雪を見ることなく、さっさとベッドを降りる。そして寝室の床に落ちている下着をはきかける。ベッドから落ちるように降

りた深雪は総一の足にしがみついた。

「別れることが一番いいことはわかっているわ･･･あなたは娘の婚約者･･･ああ、でも･･･もう別れられない･･･」

総一の足に顔をすり寄せるのだ。

「それは佳美とレズの関係になることを承諾するってことだよな」

総一が念を押す。

「･･･承諾するわ。あなたの命令通りにするわ。だから･･･だから･･･」

「だからこのペニスをくださいって言うんだろ」

「そうよ。あなたのペニスをください。深雪はあなたの女よ。たくましいペニスに溺れた奴隷女」

「今夜は佳美が勇気を出しておまえをレズに誘うんだから、母親のお前から積極的に受け入れてやるんだぜ。いいな！積極的に娘と肉体関係になりなよ」

寝室の床で深雪は四つん這いになった。総一は

「ご褒美だ」

とぴたぴたと尻肉にそそり立つペニスを打ち付けた後、一気に挿入した。根元までずんと挿入されると、深雪は肉付きの薄い白い背中をのけぞらしながらすぐに軽くアクメを迎える。

「まったく感度のいい体だな。佳美の母親の体、たまらないぜ」

総一は腰を使いながら、ビシッビシッと尻肉を叩き始めた。深雪は呼応して腰を前後に揺すりながら連続的に昇りつめる。

「あなたの恋人の母親は･･･若いペニスの虜だわ」

深雪もまた自分の尻肉を自虐的にたたき出す。

「マゾになってきたな」

「あなたの教育で･･･わたし、マゾ的になってきたわ」

深雪の分泌させた愛液が滴り落ちて、女の匂いが寝室に濃く漂った。

　総一との激しい性交を終えた深雪は、シャワーを使った。

新しい下着を穿く。総一が帰ってからまもなく佳美が帰宅した。お互いにぎこちない。それは当たり前だ。今夜、深雪と娘の佳美は、総一の命令で禁断のレズ関係になるのだ。母と娘でありながら、抱き合い、レズの契りを結ばなければならない。そんなことが本当にできるのかと深雪は足が震える思いだ。

食卓に向かい合っての夕食時には、努めて平静を装い、佳美に話しかけた。大学生活を話題にした。しかし、いつの間にか佳美との会話はうわの空になっている。目の前の淡い色のルージュを引いた佳美の唇をレズビアンの関係になって吸うことができるのだろうか。形よく隆起している彼女の胸を愛撫することができるのだろうか。そして佳美の繊細な女の部分にも･･･。そう考えると、胸が締め付けられるように息苦しくなってしまう。同時に体に淫らな熱が帯びてくるのだ。

順にお風呂を使った。髪を乾燥させてから１階の寝室に入ると、明かりを消してベッドに横たわった。寝室のドア

がノックされたのは、まもなくだった。心臓がどくりと脈打った。

「お母さん･･･」

ドアの向こうから佳美の声が聞こえる。こころなしか緊張している声だ。

「なあに？」

返事をした声は緊張感からかすれていた

「一緒に寝たいの」

佳美がドアをすっと開けて照明を落とした寝室に入ってきた。深雪の返事を待たず、ベッドに入ってくる。

「いいでしょ？」

「いいわ。一緒に寝ましょ」

佳美の手が深雪の手を握ってきた。そのまま、急に覆い被さってくる。

「ごめんなさい」

小さな声で謝った佳美は、母にキスをした。深雪も命令されている。娘とのレズ行為を拒んではいけないのだ。いや、

むしろ積極的にレズの関係を結ぶように総一に命令されていた。今なら引き返すことができるという思いが深雪の脳裏をよぎった。母と娘でありながらレズの関係を結ぶなど、畜生も劣る行為だ。そのようなおぞましく恐ろしい行為をするなど、許されるはずもない。上にのしかかる佳美の体を押しやることで、今なら禁断の行為をとめることができる‥‥‥。しかし、深雪は娘とのレズ行為におののきながらも、キスを受け入れた。佳美の舌が入ってくるのを拒みはしなかった。総一の命令にそれほどに熟れた女体は縛られているのだ。佳美の手が乳房に触れてきた。パジャマの上からブラをしていない乳房を揉まれる。ビリビリと電流が走る感覚に深雪は恥ずかしい声を漏らさないでいることが精一杯であった。佳美の指は繊細な動きで深雪の乳房を愛撫してくる。かっと体が一気に熱くなる。腰が無意識によじれ、深雪の両太股は、佳美の太股をぎゅっと挟んでいる。とうとう佳美の指がパジャマの中に入り、直接に乳房を触りだした。こらえようもないあえぎ声が深雪の口から

とうとう漏れた。

「ああっ･･･ああー･･･ああん」

甘く切ないあえぎ声は、佳美が重ねた唇にふさがれた。娘の舌を吸った。禁断のレズ行為に溺れていく我が身を呪った。血を分けた娘と肉体関係を結んでいるのだ。佳美の指が下がり、下腹部から滑り込んでくる。パンティの上から恥部を撫でられる。

「ああっ･･･あうっ」

パジャマをたくし上げられ、むき出しになった乳房を佳美の舌が這う。乳首を吸われた。ビリビリと流れる官能の電流が強くなる。舌先で転がされると、のけぞって悶えた。恥部をパンティの上から撫でている指を深雪はつかんだ。もうどうなってもいいと思った。深雪は娘の指をパンティの中に自分から誘った。深雪の決心だった。